

幼児教育学科公開講座

生命のケハイ

平成30年11月17日(土) 13:30~15:00

絵本作家 田島 征三 先生

1. 感じる

こんにちは。いつも話をする前にプロフィールを紹介してもらっただけけれど、なんか今日はすごく良かったね。感動しちゃったね。なんかすごい人がこれからしゃべるんだな…と。(会場爆笑) (注2)

最初から絵本を読みましょうか。(会場拍手) すばらしいご紹介をもらったので、心構えができてないんだけど。

今年は2冊新しい本を出しました。1冊も出さない年もあるので、2冊出すのは滅多にないことです。先ほど紹介された新潟の廃校(注3)の校庭に隣接して、池があるんだけど、環境がいいものだから、たくさんの生き物が生息して、絶滅危惧種も居ます。

『ぼくおたまじゃくし』(朗読)

これは僕の少年時代を書いた『絵の中のぼくの村』というエッセイ集(注4)にも出ているんですけど、小学校に入る一年前に洗面器の中でおたまじゃくしを飼っていたんですね。そしたらみんな蛙になって出ていったのに一匹だけ残っているやつがいる。よく見るとひげが生えている。「なまず」でした。それを外のつるべ井戸の横にかめがあって、それに入れて飼っていたんです。結構大きくなりました。そしたら雨がものすごく降った夜があって、朝起きてみたら、水があふれちゃって、なまずがいない。多分水と一緒に庭を横切って川に向かって泳いでいったのではないのか。それが、未だに、僕の心の中で、なまずが一生懸命川に向かって泳いでいくんですね(注5)。

そのなまずが、絵本に登場した。絵本を創るときというのは、いろんな生き物たちをスケッチしたり落書きしたりしているんだけど、おたまじゃくしを主人公にしようと思って、以前飼っていたなまずにたどりついて、それが絵本に結びついた。



プロフィール

- 1940年 大阪府生まれ。幼少期を高知県で過ごす。
- 1962年 多摩美術大学の在学中、手刷『しばてん』を制作。
- 1965年 処女作『ふるやのもり』(福音館書店)
- 1969年 東京都下日の出村でヤギを飼い、畑を耕し、創作活動。第2回世界絵本原画展〈金のりんご賞〉受賞。
- 1974年 講談社出版文化賞受賞。
- 1988年 絵本にっぽん賞、ポローニア国際児童図書展〈グラフィック賞推薦〉受賞。
- 1990年 小学館絵画賞、年間イラストレーション作家賞受賞。
- 1998年 廃棄物処分場からの焼却灰の飛散により胃癌、伊豆半島に移住。絵本『ガオ』を創る。
- 2009年 新潟県十日町市の廃校を丸ごと絵本にした「空間絵本-学校はカラッポにならない」を制作。
- 2013年 香川県大島、ハンセン病の収容所の島で、入所者が暮らしていた建物を「青空水族館」にし、その後『森の小径』を制作中。
- 2018年 国際アンデルセン賞国内賞受賞(注1) 伊藤忠商事のイラストレーションを担当。日経広告大賞、ADC賞(アートディレクタークラブ賞)をダブル受賞
- 2019年 「瀬戸内国際芸術祭」で大島に新作「Nさんの人生絵巻」を制作。夏の部に発表予定。



田島征三
『ぼく、おたまじゃくし?』
(佼成出版社)

この話は「自立」の話なのね。でも「自立の話」と最初から決めつけて創り始めると、説教くさい絵本になってしまう。絵のすばらしさや物語の面白さの中から、子どもたちや大人が自然と感じてくれないとね。周りには勉強のできる子がいる、足の速い子がいる。自分ができない子に思っている子がいっぱいいると思う。発達障害と言われている子もいる。その子たちは、今はそうでも将来のことはわからない。今、逆上がりも出来ない子が体操の選手になってオリンピックで金メダルとか得るかもしれない。子どもたちは未来のことは何もわからない。みんな不安の中で、生きている。

実は、双子の兄弟の征彦と一緒に知恵遅れって言われたのね、子どものとき戦争中で、僕たちは腸炎になった。だから、赤ん坊なのに栄養摂取できなくて、栄養失調になった。すると、脳の発達も遅れて、特に小脳の発達が遅れて、いろんなことができなくて、周りの悪たれたちにいつもいじめられていた。僕の方は、癩癩もちで殴られても殴り返すので(注6)、余計やられていた。征彦の方は泣きっぱなしで、しかも泣き声の人が違うのです、「お～いよいよい、お～いよいよい」と泣くんです。

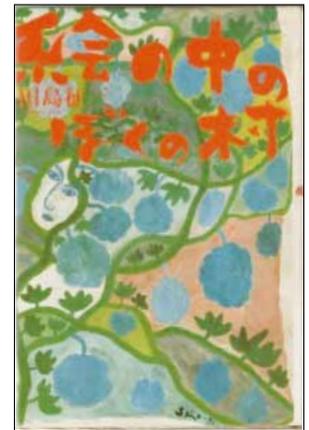
(会場爆笑) だから教室に居ると、校庭のセンダンの木の方から「お～いよいよい」と聞こえて「また、ゆきちゃん、いじめられてる」と行くと、3人くらいの上級生が蹴ったり叩いたりしている。「おまんら、何してるがぜよ～」と僕も飛び込んで行くと、僕も一緒にいじめられる。(会場笑い)

特に校長が僕たちをいじめたんです。戦争が終わったばかりの頃で、民主教育も始まったばかり。母親は小学校の先生をしていて、同じ学校の先生、日教組という教員組合の文化部長が何かでした。校長は右翼だったので、母親は対立して追い出されてしまったんです。僕たちは母親の身代わりとして、いじめられたんでしょう

ね。全校生徒が50人くらいしかいなくて、校長先生も授業していたんです。僕たちも校長室に大きな石を放り込んだりして抵抗していたんですけど、そのために「鏡川学園に入れるぞ」とよく言われたので、僕はそこが少年院か鑑別所のようなところだと勝手に想像していたのだけど、後でわかったことには、知恵遅れの子の学校だったのですね。

僕は今でも知的障害の方たちとの付き合いがあります。滋賀県の日本で一番古い、知的障がい者の成年の生活寮と作業所を兼ねたところに入り浸っていたので(注7)、作業主任が「せいちゃんちょっと用事があるから門の横で待っててよ」と言うので、そこで立っていると、婦人団体のおばさんたちが見学にきてぞろぞろ通る。その中の一人が走ってきて、僕に「あなた年いくつ?」なんて聞く。なんで、僕に年を聞くのか、知的障がい者と間違えているんだね。結局、向こうも気がつくんです。気がついたときに、態度が急に変わる。知的障がい者と間違われるのはかまわないが、その時の態度の変わり方がイヤな感じだね。(会場笑い)

「絵本と木の実の美術館」が一冊の写真集として、2015年にできました。兵庫県出身のデザイナー、北川一成(注8)という世界的に活躍している人で、とんでもないことをする人なので、絶対この人に頼もうと思って頼んだのですが、その人も知的障がい者だと思われていたみたいで、子どもの頃に「また、イッセーがアホなことしよる」と言われていたみたい。



田島征三
『絵の中のぼくの村』
(くもん出版)



田島征彦・田島征三
『ふたりはふたご』
(くもん出版)



ある時、虹が出ていた。一成さんは虹をつかまえようと、ポンコツの自転車を一生懸命こいでいた。周りのみんなは「虹なんかつかまるわけじゃないか、やめとけ」と言っている。後ろから一成さんのお母さんが血相変えて走ってきた。「イッセー、これに虹入れてこい」と言って、レジ袋を手渡してくれたんだね。いいお母さんだね。(注9) 一成さんは自分が何になるかはわかっていなかったけれど、お母さんは、この人はちゃんとした、すごい大人になれるんだと信じていたということですね。

(注10)

『ぼく、おたまじゃくし?』は、誰かが信じてくれていて、誰かが守ってくれていると、人は劣等感に打ち勝つ力を持てるんじゃないか描いた絵本ですね。でも、こうして解説したら、どうしようもないね。絵本を読んで、「ああ、そういうことか」と読んだ人が自分で感じないとね。



2. 知る

もう一冊、今年描いたのは、『わたしの森に』。アーサー・ビナードというアメリカ人の詩人が1990年に日本にやってきて、日本語で詩を書いて『釣り上げては』と

いう詩集でなんと、中原中也賞もらっているんですね。人間としても非常におもしろい人です。今年2018年「大地の芸術祭」(注11)でアーサー・ビナードとコラボレーションをしたんです。テーマは「mamushi」。この村にmamushiがいっぱいいるんです。そのmamushiをテーマにして何か創れないかということで、巨大なmamushiを創ったんです。その過程で、制作中に絵本も創ることになりました。

アーサー・ビナードが文を書いて、僕は絵を描きました。アーサー・ビナードは日本の古典文学「枕草子」のようなものを創れないかと言ったんです。mamushiに清少納言になってもらおうということです。「枕草子」は春から始まるけれど、これは冬から始まります。



アーサー・ビナード文 田島征三絵
『わたしの森に』
(くもん出版)

『わたしの森に』(ページを繰りながら一部朗読)

新潟の十日町の山奥の「鉢(はち)」集落の雪は湿っていて重いんです。絵本では雪が解け始めても、絵本には雪景色が続いていて、なかなかmamushiが出てきません。mamushiが出てくると絵本買ってくれないのではないかなと思ってね。(会場笑い)

mamushiのここ、目と鼻の間にピット器官というのがあって、これは赤外線を感じて、真っ暗でもわかるんだそうです。知らなかったでしょ?(会場うなづく) mamushiは、暗闇の中で獲物にかみつくと、それを一旦口から放す、mamushiには強い毒があるから、即死する。毒が全身に回ると、筋肉がやわらかくなり、肉もおいしくなるのではないかな、それを僕は勝手に「料理する能力がある」と思っている。

それから、マムシは、遅延受精ができるんです。いい男がいたら、とりあえず交尾しておく、精子を蓄えておける。適当なときがきたら卵子と結合させる。人間もそれができればね…。マムシには5年も経ってから生まれる場合もある。だいたい3年間は蓄えておけるんです。また、マムシは胎生なのです。普通の爬虫類は卵ですから、孵ったときに親はいないし他の動物に食べられる。餌を捕る力も無いので餓え死にしまして、ほとんどが育たないのですが、マムシの場合には育つのです。

マムシが読んで、喜ぶような絵本を描こうと思ったのです。マムシは読まないけれどもね。(会場笑い)

僕は高知のド田舎で育ったから、マムシはたくさんいた。都会から、ご主人が戦死して、子どもが三人いる、ひ弱な女性に移り住んできた。とても一人では生きていけないように思っていた人が、マムシをつかまえて食べて、そして、子どもも育て、百姓もやっpegんばった。また、「絵本と木の実の美術館」のある、鉢(はち)という集落でも、二十歳まで生きられないと言われていた男性が、マムシを捕まえては食べていたので、村で一番元気な人になった。未だに食べているんですね。また、焼酎に付けておいて飲むと体にいいですね。アーサーと僕は、去年の冬、マムシ酒を飲みながら対談をした。

ただね、僕もむやみにマムシを殺しているんです。役に立つように殺すのなら、まだ許されるけれども、「わあ、マムシだ」とやみくもに殺している。そういう殺し方をしたっていうことは、未だに慚愧の念に堪えない。マムシのことを知ると、赤外線探知ができたり遅延受精ができたり、すばらしい能力を持っているとわかるのに。相手のことを知ると、気持ちは違ってくるのに。それはそれで大事だと思う。

今、ヨーロッパでイラクとかシリアとか逃げてくる人たちがいますよね。死に物狂いで逃げてくる。でも、肌の色が違うとか言葉が違うとかいうことで、排除する。命からがら逃げてきても、またそこで迫害される。今アメリカがメキシコ国境でもそういうことやってますね。日本でどうなのかというと、日本でも在日の人たちを未だに差別している。関東大震災のとき、今から95年前ですが、そのとき大人だった人はもう亡くなっていますが、朝鮮人が暴動を起こすのではないかと、井戸に毒を流すの

ではないかというデマが流されたんです。本当にひどい地震ですから、人はみな心が動揺している、それで、そのデマに乗って、朝鮮人だと見たら石を投げつけて殺したんです。千人以上の朝鮮人が殺されました。これは自警団が殺したのではなく、一般の普通に生活している人が殺したのです。そうしてみると、相手のことを知らな



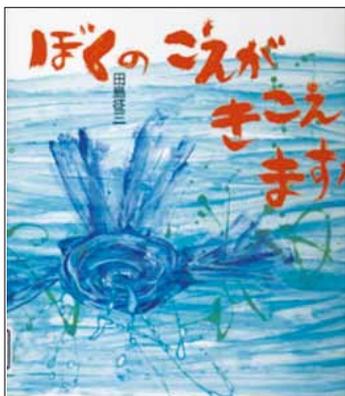
い、そして不安があると、人間というのは錯乱状態の中ですごい恐ろしいことをしてしまうものなんですね。残念ですね。それは今から95年前の話ではありますが、60数年前、第二次世界大戦のときにも中国大陸や朝鮮半島でいろんなことが起こっている。そして今もヨーロッパやアメリカでそういうことがある。日本でも差別はいっぱい残っている。

3. つながる ～絵本の可能性～

人間の本質というのは、本当は優しい。相手のことをちゃんと理解できるはずの人たちが豹変していくのは、すごい残念です。

今から10年くらい前、日本と中国と韓国、絵本作家が集まって、平和絵本を創ろうというプロジェクトが立ち上がったんです。ぼくは、日本では売れてないんだけど、中国と韓国では、結構売れる、もててるよ。知らないでしょ。(会場爆笑) ぼくらは、是非一緒にやろうよって手紙を出して、日本からぼくたち4人の絵本作家が行って話をしました。すると、「私たちはやりたい。でも、周りが

反対する。日本人とやっけてろくなことないって言われた」と。「日本人て嘘つきじゃないか」と。確かに今も、徴用工の問題、戦争中に炭鉱の危ない仕事を韓国や中国の人を拉致するように無理に連れて来て働かせ、逃げ帰る人を殺したりしたことの、裁判が行われ判決がでた。相手の側は、怒りを感じている。日本はお金で解決して終わりと思っけていても、拉致され殺された相手側の怒りに終わりはない。そのことを日本人は知る必要がある。僕は5歳の子どもだったけれども、子どもだったから知らないでは済まされないのではない。韓国や中国の人にもわかってほしい。最後は泣きながら訴えました。



田島征三
『ぼくのこえがきこえますか』
(童心社)

「一緒に絵本を創ろう。そうしたら、お互いの気持ちかわかるよ」と。最後には抱き合っけてわかりあえました。それで、日本の絵本作家4人、韓国も4人、8人で南京に行きました。そして南京で中国の4人の作家と話をし、絵本作りが始まったのです。

ところが、日本の絵本作家の浜田桂子さんの『へいわってどんなこと?』(注12)という絵本の中に原爆を感じさせるようなシーンが出て来るのだけれど、それを目にした中国と韓国の人が、「被害者意識丸出しじゃないか」と怒り出したのです。僕は原爆が許せないので、絶対に忘れない、いつまでも深く胸に刻んで、世界中に訴えて続けていかなければいけないと思っけています。けれども、それを前面に出すということは、中国や韓国の人から見るとどうなのか。「あなたたちも私たちにとんでもないことをしてきたのに、あなたたちは原爆のことばかり言う。その被害者意識丸出しの姿勢は違うんじゃないのか」と当然思うでしょう。それがすべて正しいとは言わないけれど、そこに思い至る、配慮できる絵本でないといけない…と、いろんな葛藤を経て絵本ができました。



過去でなく、今もここで、戦争が起こるかもしれない、それを止めないといけません。少し話が飛びますが、ちゃんとつながりますよ。ダルトン・トランボという人が、『ジョニーは戦場に行った』という映画をつくった。この戦争は第一次世界大戦。戦争で主人公は、生きる肉塊となります。最終場面で彼の姿が暗い闇の中に消えていく、胸が引き裂かれるような救いようのない戦争映画です。ダルトン・トランボは、その思想のために国外追放されてしまっけていますが、その後も偽名をつかっけて脚本を書いたのです。それが『ローマの休日』です。この映画でも、王女が最後に後ろ姿を見せて消えていきます。前作と同じように、この先、不条理な世界で生きていく王女を表しているようです。様々な紆余曲折を経て生まれた、日中韓の平和絵本が『ぼくのこえがきこえますか』です。(朗読)

絵本で戦争がとらえられるのか、という疑問がありまっけて、強いメッセージ性を伝えるのに有効かなという思いもあります。確かに(「ジョニーは戦場に行った」の映画のような)映像の方が強いです。歌の方が強いです。絵本は動かない、単に一冊の本だけれど、これで反戦の気持ちを伝えること、人の残酷さ、人の切なさ、人の哀しみを伝えることができなくはないのではないかと考えています。アートの方に期待している(注13)。

リアルな絵ではなくて、抽象と半具象、抽象の絵は(たとえば、これなどは)一見すると「どうさんかな?」と思うかもしれませんが、絵本は絵と言葉でできているので「かあさんの かなしみがみえる どんな いかりよりも つよく ふかい かなしみ。」という三行の言葉と、この抽象

画で伝わるものはかなり有効ではないかと思っています。むしろわかりやすい絵では伝わらないのです。他にも「おとうとの いかりが みえる。ゆきばもなく どろどろと うずまく いかり」のページも完全な抽象画です。

見えない感情を見えるようにするのは、やはり抽象画しかない。シュールレアリスム(超現実派)(注14)という方法があります。けれどシュールレアリスムで伝えられることは、限度・限界があると思います。すばらしい画家もいますけれども、今、複雑になった現代社会で、抽象画は非常に有効だと思っています。

それから『花ばあば』という絵本(注15)は従軍慰安婦を描いた絵本なのだけれど、それが韓国で出され、中国でも出された。しかし、この本を出す約束をした童心社に「こんな本は出さないことに決めました」と言われました。激しくやり合ったのですが、もう決まったものは変わりません。政府や右翼を怖がって出さないから、真実を知らせないから、戦争が起こったのではないのかと、他の出版社を探しました。先も言ったように、韓国からは「日本人は信用ならない」と思われているわけですから…。そして、ただ一人でやっている小さな出版社(ころから)から、今年(2018年)4月によく出せました。



クオン・ユンドク
『花ばあば』
(ころから)

けれども、つい先ほども、こちらの福井県立図書館や短大の図書館に問い合わせてもらいましたが、この本は置かれていません。実は、僕は調べてもらう前から知っていました。図書館は日本に4000ほどあるのですが、『花ばあば』は、そのうちの100の図書館でしか入っていないのです。図書館に入れる本を検討する組織が、「この本は推薦しない」と決めたからです。これはひどい。このように、現代日本にもまだ差別や偏見は残っているのです。けれども、韓国の作者の方は、日本で絵本が出たということをととても喜びました。

4. 創る ～生命のケハイ～

「絵本と木の実の美術館」の写真で、来年(2019年)のカレンダーを、ジーンズ屋さんが創ってくれたのでお見せします。今年は空間絵本の内部は触らずに、外にオブジェを創りました。

一般に、美術館というのは生き物を拒否するところ、昆虫を目のかたきにするところなのです。どういうことかという、現代美術館、すばらしくきれいな美術館の前に水面があって、水面に美術品を写すと美しい仕掛けになっている。僕もそういうところで木のオブジェの展覧会をさせてもらったことがあります。そのとき、オブジェをしつらえるためにスタッフが足を水に入っていると、足がみるみる赤くなっていく。強アルカリの水だからです。トンボが一生懸命卵を産んでも、卵は即死。小鳥も水を飲むんですよ、必死で。強アルカリにするのはアオミドロの発生を抑えるためだけれど、果たして、生き物を殺して、それが美しいか。僕は、生き物がいる美術館、床の下にイタチが巣を作っているような、「生き物のケハイ」がする美術館こそが本物の美術館だと思うんですね。(注16) 僕の美術館の小川もアオミドロができる。でもそれをドジョウや魚が水と空気をかきまぜてくれて発生をおさえてくれる。魚、鳥、蛙、蛇、狸、アナグマ、イタチが居て、その頂点が鷹、その鷹が毎日来ていたのに、ある日その鷹が殺された。イタチの頭を切り、血を吸い、狸が肉を食べた。残酷だけれど、命はそうしてつながっていく。この写真は、鷹の魂を木のオブジェにして大空に吊るしたもの。「絵本と木の実の美術館」は、流木のオブジェが多くて、絵は子どもがウミサキ先生を黒板に描いた絵だけ。これは、子ども達3人の姿をオブジェにしたもの。もうみんな大人に成長しました。これは、mamshinの大きなトンネル。雪が多くて重いところなので、「早く壊せ」と集落の人は言うんです。雪の重みで飛び散るんですね。それで1週間前に全部壊しました。トンネルの中では、アーサー・ビナードが創って自分で歌っている「mamshin小唄」が流れているんです。「mamshin♪おそろしい♪」っていう感じの歌です。

新潟の鉢集落の「絵本と木の実の美術館」にもいらしてください。「いりやま」という地名があって、野菜を

作っているおばあちゃんたち、入山（いりやま）シスターズがおもてなしをします。この入山シスターズは『花ばあば』の著者（クオン・ユンドクさん）に「おめでと



う、日本で出版出来てよかったね」と伝えました。著者は泣きました。というのは、ちょうど元慰安婦の方々が入山シスターズは同じような年齢なんですよ。国同士のこれまでの複雑な経緯を乗り越えて、個々の同じ人間としてつながり合って、仲良くやっていけばいいではないかと感じられたからです。アメリカで、黒人が白人にリンチされたことで、黒人が暴動を起こしたとき、たくさん人が殺されたけれど、「仲良くしようよ、許し合おうよ」とリンチされた本人がメッセージを出したんですね。そこに共感が集まりました。人間は、その気持ちがあれば、仲良くしていくことができるのです。

(注1) 国際アンデルセン賞は、2018年の角野栄子氏の作家賞受賞により、日本における歴代受賞は計5人となった。作家賞は歴代3人になったが、画家賞は依然として2人(赤羽末吉、安野光雅)。

(注2) 「(受賞歴等の紹介に続けて)ところで、私にとりまして先生の作品との出会いは、この『しばてん』の絵本でした。絵も文も田島先生です。絵の広がりとお行き、自由闊達で力強く生き生きとした感じ、何よりここに込められた人間洞察の深さに心から感動したものです。しかも、この作品は、先生が美術大学の在学中に、手刷りで創作したものとお伺いしました。とても驚きました。それ以来、数々の作品を読ませていただきましたが、「なんで、こんなにも、田島先生の作品に惹かれるんだろうか」と立ち止まってみると、田島先生の絵や絵本には共通して、人間の…というか、生き物の、寂しさとか、悔しさ、残念さというものが含

まれているように思います。それが、いつしか勇気に変わる。そこに、大人はもちろん、子どもにも伝わりやすい形(筆者注:受け手側が身の丈に合っただけを自由に摂取できる仕方)で、命の深さ、広さ、重さ、尊さを語りかける哲学が秘められているように思えるのです。」と訥々と前田がご紹介したことを指す。「感動しちゃったね」とは会場の緊張を和らげるための先生の一般のユーモアだが、この時点でご講演内容を詳しく知らない紹介者(前田)が、ご講演後半の「絵本で戦争がとらえられるのか、という疑問がありますけれど、強いメッセージ性を伝えるのに有効かなという思いもあります。確かに、映像の方が強いです。歌の方が強いです。絵本は動かない、単に一冊の本だけれど、これで反戦の気持ちを伝えること、人の残酷さ、人の切なさ、人の哀しみを伝えることができなくはないのではないかと…」の伏線を張ったようになった。

(注3) 新潟県十日町市真田甲2310-1『鉢&田島征三絵本と木の実の美術館』のこと。廃校となった小学校を利用して創った「空間絵本」美術館。この他、香川県大島には『森の小径』がある。

(注4) エッセイ集『絵の中のぼくの村』(1992年 くもん出版)には、双子のご兄弟、田島征彦先生と高知県で過ごされた少年時代の思い出が綴られている。同題で、東陽一監督が映画化し、第46回ベルリン映画祭で銀熊賞受賞。その映画には、征三先生と征彦先生も出演されている。また、絵本『ふたりはふたご』(1996年 くもん出版)は、征三先生の油彩と征彦先生の型染の手法を融合したもの。共に絵本作家であるお二人が各々の手法で自身の姿を描き、性質の違いもさりげなく巧みに表現されている。

(注5) 映画でも、夜の雨の中を移動するなまずが描かれている。なお、『あめがふるふる』(2017年 フレーベル館)の表紙などにも、それらしき姿が描かれている。

(注6) このユーモアは、エッセイ集『人生のお汁』(2002年 偕成社)の「罵詈雑言」のエピソードを彷彿とさせる。また、同書「酒盗とままかり」には「怒りをエネルギーに転化させることで、創作活動をつづけてきたように思う。」とある。

- (注7)この施設の利用者たちとの交流はエッセイ集『ふしぎのアーティストたち—信楽青年寮の人たちがくれたもの』(1992年旬報告社)に書かれている。
- (注8)北川 一成 グラフィックデザイナー・アートディレクター。GRAPH取締役社長
- (注9)このように子どもを理解する母親像は、映画『絵の中のぼくの村』の征三の母にも共通する。いたずらを村人たちから咎められた双子の兄弟に向かって「気持ちよかつたじゃろうね」と母親が目を細める場面がある。ご講演後の質疑応答で「先生は双子のご兄弟ですが、お母さまはどのようにお二人に接していらしたか」との質問の際に「佐野洋子さんがお母さんのことを『しずこさん』というエッセイにまとめていますが、僕もいつか書きたいと思っている」とお答えになった。『絵の中のぼくの村』(1992年 くもん出版)の「母のこと」に「大人になってぼくがいつか立派な絵かきになれたなら、美しい母の姿をすばらしい絵に描こう。そしてその絵を世界中の人々に見てもらい、そして母に贈ろう。そうすればきっと母は今の哀しみを忘れるほど喜んでくれるに違いない」とある。
- (注10)田島征三先生ご自身が、子どもの感性を信頼していることは、「子どもはいずれ大人になる。子どものころに好きだった絵本を大人になってから見て、『なんだ。こんなチャチな子どもだまじだったのか』とがっかりさせたくない。大人になってから見ても『こんなすごい芸術作品だったのか』と驚かせるような絵本しか、存在する意味はないと思う。絵本はアート作品であるべきなのだ。そういう意味では、ぼくは大人に向けて絵本を描いている。ただ、それは子どもを無視しているということではない。すぐれた感性をもつ大人がおもしろいと思うものは、子どもだっておもしろがるのである。」等に表れている。(エッセイ集『人生のお汁』(2002年 偕成社))
- (注11)2009年第4回「大地の芸術祭」。このとき、2005年に約130年の歴史をもちながら廃校となった旧真田小学校を舞台に、空間絵本『絵本と木の実の美術館』を開いた。
- (注12)浜田桂子『へいわってどんなこと?』(2011年 童心社)
- (注13)元来、絵や言葉の表現は、俳優や背景が実写される映画やメロディーで印象付けられる歌と比較して、数段「抽象」表現であろう。その上、「抽象画」で表現された哀しみや怒りは、他ジャンルと比較しても、万人に伝わりやすく、国境や個々の立場の壁を軽々と超えていく、特有の可能性をもつのかもしれない。「命の深さ、広さ、重さ、尊さを語りかける哲学が秘められている」作品の魅力(注2)は、多くのファンを魅了してやまないものであり、その魅力が平和絵本を引き寄せたのかもしれない。
- (注14)フランスの詩人アンドレ・ブルトンが提唱した思想活動。一般的には芸術の形態、主張の一つとして理解されている。日本語で「超現実主義」と訳されている。
- (注15)クォン・ユンドク (翻訳:桑畑優香)『花ばあば』(2018年 ころから)
- (注16)この姿勢は一貫している。題名もそのままの『いのちを描く』(1991年 童心社)のエッセイ集の他、エッセイ集『人生のお汁』の『グリグリグリッ』の思想に「グリグリグリッは「命のひびき」そのものだった。あの振動のなかに、命のすべてがあった。(中略)渡り鳥のなかにも、畑の野菜のなかにも、同じものがあつた。もちろん、ぼくたち人間のなかにも。この「命のひびき」を描くために、ぼくは絵描きをつづけてきたのかもしれない。だが、グリグリを表現しようとして筆をにぎっても、それでは絵にはならない。ぼくの身体のなかにしみこんでいるものが、知らぬまにしみ出してくるのだ。」とあり、終始一貫している。

(文責 前田敬子)